# コツコツ学ぼう！ほ ね で ら 今 昔 物 語

## ～ 中尊寺と骨寺村の絆・編 ～

**第6号**

今年6月、10年越しの悲願が叶い、〝平泉〟が世界遺産登録になりました。その3カ月前に起きた東日本大震災で、かつてない悲しみの渕に立たされたみちのく東北は、登録の瞬間、歓喜に包まれました。戦乱の世から平和な社会へ―という奥州藤原氏初代清衡の理念が、震災復興の理念に通じるということで、登録は復興への大きな弾みになると期待されました。

その世界文化遺産の構成資産のひとつである中尊寺と骨寺村（現、一関市厳美町本寺地区）は、古より深い結びつきを持っています。

かつて本寺地区が骨寺村と呼ばれていた12世紀の初め頃、藤原清衡は新たな都市造りに先駆け、平泉に中尊寺を建立しました。その際清衡は、長く悲惨な戦いで犠牲になった命ある全ての霊を弔い、現世に仏国土（浄土）を築こうと『中尊寺建立供養願文』を起草し平和宣言を行ったのです。

さらに清衡は、当時骨寺村の天台僧だった自在房蓮光に5300巻に及ぶ写経という一大事業を託し、蓮光は8年もの歳月をかけ「紺紙金銀字交書一切経」という荘厳な経巻を完成させました。清衡は供養願文が謳う理想郷の実現に向け、中尊寺建立と骨寺村の僧侶だった蓮光に写経事業を行わせたのです。

自在房蓮光

その後蓮光は、清衡からそれらの経を納める経蔵の初代別当に任ぜられました。蓮光は私領であった骨寺村を経蔵に寄進、骨寺村は清衡から経蔵別当領（経蔵の荘園）として相伝を認められます。

平和希求と鎮護国家（仏教によって国や政治を安定させるという思想）の象徴的存在だった中尊寺経蔵。その経蔵を300年にわたり経済的に支えた骨寺村の存在は極めて重要といえるでしょう。

100年の栄華を誇った藤原氏が滅んだあと、当時の経蔵別当・心蓮は源頼朝に、紺紙金銀字交書一切経を納める経蔵の重要性を訴え、結果頼朝は、それを支える骨寺村の四至※を定め、その後も中尊寺経蔵の荘園として認めました。

国の重要文化財に指定されている絵図並びに中尊寺文書の半数近くが骨寺関連文書であり、それらの文書によれば、骨寺村は分割して支配する他の中尊寺領と違い、経蔵別当職の丸々一村支配という特徴を持っています。このことから、経蔵別当職の相伝と骨寺村は、少なくとも200年間、一体の関係を保っていたと言えるのです。

戦前まで行われていたという、中尊寺経蔵別当である大長寿院住職による慈恵大師拝殿や山王窟での「護摩焚き」、骨寺村で収穫された米などを中尊寺に納める「米納め」の儀式。後者の行事は地元が数年前に復活させ、今月18日に第5回目が開催されます。

中尊寺と骨寺村の深い〝絆〟は骨寺村荘園遺跡の景観とともに900年にわたり続いているのです。

（荘園室・N）

※ 四至＝東西南北の境界

昨年の米納めの様子
（中尊寺経蔵の前で）